

## 下村観山筆「魔障図」をめぐる考察

椎野 晃史 (学習院大学)

下村観山筆「魔障図」(東京国立博物館蔵)は、明治43年の第4回文部省美術展覧会(以下、文展)に審査員として出品した作品である。本図は深山幽谷の地で仏道修行に従事する僧とそれを妨げる異形の群衆を描いた仏教的主題の作品であり、観山唯一の白描画の大作として注目すべき作品といえる。本図についての言及は展覧会図録の作品解説等しかなく、具体的な検討はなされていない。よって本発表では、本図の制作事情、造形上の特質の考察を主たる目的とし、作家研究及び、近代日本美術史の新たな構築へと向かいたい。構成は(1)作品概要、(2)画面の着想と主題について、(3)白描表現をめぐる考察、の三部から成る。

(1)では作品の伝来、同時代批評を確認し、そして本図の下絵や画稿と本画の相違点を指摘する。本図は旧原三溪所蔵の作品で、まず三溪所蔵の経緯を追う。続いて本図に言及した同時代の批評を仔細に参照し、本図に向けられた当時の評価を確認する。また本図には下絵、画稿群が数点残されており、本画へ至るまでの構想の変化を辿る。

(2)では、本図の画面構成に注目し、着想を得た先行作例を提示する。真鍋俊照氏は密教における結界作法との関わりを指摘し、降魔図を和様化した可能性を示唆された。発表者は本図が東寺蔵「弘法大師行状絵詞」の魔障が登場する場面と近似することを指摘し、よって本図が弘法大師を絵画化した可能性も提示したい。また制作当時、多くの仏伝図が描かれたことを確認し、明治後期に台頭するインド趣味について言及する。

(3)では、本図が白描表現を用いた契機について考察する。本図が制作された明治後期は、「木の間の秋」や「小倉山」など画家の代表作が集中しており、観山芸術における絶頂期として位置づけられ、画壇における画家の地位を揺るぎないものとした。しなしながら本図は、これら展覧会出品作の造形的特徴—濃彩金碧—を否定し、白描表現を用いている。発表者はこの作風の振幅を問題視し、白描表現を選択した理由を考察する。

明治時代の白描画制作は、狩野派や住吉派など伝統的流派の解体、展覧会芸術の勃興により、一時衰退するが、明治30年代後半から徐々に復興されていく。本図に先行するものとして、吉川霊華や安田靉彦による白描画作品が挙げられるが、官展という公的な展覧会に初めて出品された白描画という点で本図の意義は大きい。また発表者は白描画制作の契機に「鳥獣人物戯画」があることを指摘する。「鳥獣人物戯画」との近似が単にモチーフや表現を借用したに止まらず、諷刺的精神をも継承したと発表者は考え、本図に新解釈を加える。すなわち、文展における新派と旧派の対立を諷刺的に捉えている可能性である。

以上の検討を通して従来の観山像を見直し、同時に近代白描画という枠組みを提示することで、近代日本画研究に新しい切り口を提案する。